



# サイクロンから見たミャンマー

田村 克己 (たむら かつみ)

本館民族社会研究部

## 天災よりも人災

今年五月、ビルマ(現国名ミャンマー)に、大型サイクロンのナルギスが大きな被害をもたらした。長くこの国につきあつてきたわたしは、現地のさまざまの知り合いのことを思うとともに、大いに驚かされた。その理由は、ビルマの人びとがこの国を大きな災害のない国といつてきたように、実際にそうしたことにはこれまでほとんど出会わなかったからである。初めて訪れたときの数年前、一九七五年に地震があつて、バガン遺跡が被害を受けたことを思い出すくらいである。

この国にとつて災害といえは、天災よりも人災の方が深刻かもしれない。一九六〇年代初めの調査に基づく民族誌によれば、政府は地震や洪水とともに、人びとにとつて五つの敵のひとつであるという。当時は軍が政権をとる前であつたから、政権それぞれ性格によつてではなく、人びとが政治権力に対し、伝統的にとつてきた距離と態度からこうした語りが出てきたのであろう。

わたし自身も調査地で、ともすれば恣意的な権力の行使と、敬遠してそれに近づかない人びとの態度を見聞した。わたしのフールドの村は、イラワジ川中流の氾濫原に位置しており、水が引くとともに順々に土地を耕して作物を栽培する。ところが、ある年に、退いていく水をせき止める堤が

築かれ、氾濫原の一部が貯水池のようになっていた。村人によると、政府の命令でこの堤を築かれたとのことである。村人は、従来通り耕作ができなくなつて困つたと言うが、他方で、あきらめに似た表情を浮かべるだけであつた。しかし翌年訪れてまた驚かされた。堤があとかたもなく、従来のように氾濫原が広がつていたのではないか。聞けば例年の雨季の洪水によつて堤が流されたといひ、そこにはこれまでと変わらずに平然と農作業にいそむ人びとの姿が見られた。

## 人びとの絆による復興

今回のサイクロンの報に接し、ビルマにかかわつてきた者の多くの戸惑いは、どのように人びとに救援を届けるかであつた。その背景には、さきに述べたような政府と人びとの関係がある。実際に、現政府の救援対策に対しての不信や不満がその後しばしば報道されている。他方でビルマの一般の人びとが政府の手を借りることなく、自分たちの力で被災地への支援をおこなつていることを現地の知り合いから幾度か聞くことがあつた。国連とASEAN(東南アジア諸国連合)とミャンマー政府による被災状況の報告書が公表されるにあつて、シンガポールの外相は現地の人びとの一致協力と団結を特にとりあげて述べた。

今回のサイクロンの災害については、これからの過程を十分に見極めていかねばならないのはもちろんであるが、どうも今のところ、復興をもたらすのは、人びととの疎遠な関係にある政府ではなく、伝統的な人と人との結びつきのようなのである。



平然と農作業にいそむ